

自著紹介

『貧しい人々のマニフェスト—フェアトレードの思想』(フランツ・ヴァンデルホフ著、北野収訳、創成社、2016年) 獨協大学・北野収

はじめに

欧米での普及状況にはまだまだ及ばないものの、日本でも少しずつフェアトレード商品を見かけられるようになってきた。また、一部の学生のフェアトレードへの関心は高い。フェアトレードの起源には諸説あるが、認証ラベル制度を一つの「起源」とみなせば、世界初のフェアトレード認証ラベル「マックス・ハベラー (Max Havelaar)」(現 Fairtrade International) が1988年にオランダで設立されたことは今日のフェアトレードの隆盛のきっかけの一つといえる。

本書の著者、フランツ・ヴァンデルホフ (Francisco VanderHoff Boersma または Frans van der Hoff, 1939-) は解放の神学の流れを汲むオランダ人カトリック司祭である。彼は、チリおよびメキシコシティでの労働司祭活動を経て、今日に至るまで40年近く、メキシコ南部のオアハカ州の山岳地帯で経済的極貧状態にあえぐ先住民民族コーヒー農民とともに暮らし、UCIRI 組合 (Unión de Comunidades Indígenas de la Región del Istmo) を設立した。そして、「コヨーテ」と呼ばれる現地の仲買人からの脅しやオランダ国内で大手企業からの差別的扱いを受けながら、世界初の国際フェアトレード認証の仕組みマックス・ハベラーを設立した。フェアトレード運動の「父」と言われる所以である。

本書は、いわゆるフェアトレードの解説本や現地実証調査の研究書ではない。「経済のために人間が存在するのではない。フェアトレード

運動の父、ヴァンデルホフの壮絶な闘いからのメッセージ。新自由主義市場を特徴づける搾取、暴力、不正義に対するストレートかつ挑発的な批判を述べる」。このコピーは私が書いたものではなく、販売側が作成したものだが、本書の意義を的確に説明している。第一義的に、本書は「マニフェスト」以外の何物でもない。本書を読んだ者は、フェアトレードに「チャリティ、支援の一形態」といった意味以上の深く、大きな意義を感じざるを得なくなる。

ヴァンデルホフの生い立ち、農民とともにフェアトレードを提案した経緯については、拙著『南部メキシコの内発的発展とNGO』(勁草書房) および N. ローツェン・F. ヴァンデルホフ『フェアトレードの冒険』(日経 BP 社) を参照されたい。

日本語版の概要

オリジナルは2010年のフランス語版で、拙訳の底本にしたのは2014年のイギリス版である(最初の英訳は2012年のカナダ版)。以下、日本語版の概要を述べる。

第1章「経済危機に直面する貧困者」では、執筆当時のリーマン危機を念頭に、グローバル資本主義と新自由主義の矛盾の歴史的必然性とともに、世界各地でみられる社会的連帯経済の萌芽、資本主義の矛盾を克服するための手段としてのフェアトレードの意義と抱負が述べられる。

第2章「危機が持続する構造」では、リーマン危機への対応でのオバマ大統領の迷走、グローバルな「自由競争」を謳歌してきた大手銀行の救済のためにアメリカ国民の血税が投入されたことを例に、誰も失敗の責任はとらず、そのツケは国民に回される仕組みが制度化された新しい「金権政治」(企業が政府を操る)という構造が資本主義の矛盾の現時点での到達点であるこ

とを確認する。

第3章「下からのグローバリゼーション」では、この構造的矛盾に目をつぶり、富裕国・富裕層が上からの一方的なチャリティ活動、開発支援を行うことが、問題の解決にはつながらず、むしろ矛盾から目を背けることに加担すると指摘する。対策として、貧困者自身の主体性と倫理的消費者との連帯に基づいた真の代案が必要であり、メキシコ・オアハカ州テワンテペック地峡で始まったその実践(フェアトレード運動)は既にグローバルなレベルにまで拡大していることを確認する。

第4章「もう1つの世界は可能だ」では、小規模金融やフェアトレードなど第三世界各地で立ち上げられた社会的連帯経済の意義の再定義と可能性が述べられる。興味深いのは、ムハマド・ユヌス(グラミン銀行)とヴァンデルホフとの違いである。ヴァンデルホフはユヌスの「社会的資本主義」というコンセプトを批判する。社会的ビジネスの重要性は否定しないが、「ビジネス」だけで、金権政治、ウルトラ資本主義を改めることはできない。人々による道徳的な対抗運動も必要だというのが、彼の立場である。ブータンの国民総幸福量(GNH)、ボリビアのモラレス大統領、ガンジーやマンデラ等のエピソードに言及し、「開発」の政治性から目を背けるなというメッセージが暗喩される。

第5章「私はもう1つの世界の夢を描いた」は、こうしたメッセージが広汎に受容されるには、もう1世代分の年月を要する(第4章末尾)と考える1939年生まれの彼が将来世代に託した「遺言」である。

実は、マニフェスト部分は英語版でわずか88頁、拙訳書も図版込みで103頁に過ぎない。日本語版には、私が新たに書き下ろした61頁の解説エッセイ「認証ラベルの向こうに思いをは

せる」を収録した。解説エッセイの構成は「はじめに～フェアトレードについて～ヴァンデルホフの半生～「フェアトレードの思想」を考える視点～回想のテワンテペック地峡～開発・発展をめぐる天動説と地動説～おわりに」である。私がヴァンデルホフに面会した時のエピソードも綴った。

貧者に「寄り添う」こと¹

日本語版の冒頭に私は次のメッセージを書いた。「本書のメッセージは過激で非現実的だと感じる方が少なくないと予想する。ヴァンデルホフ神父の言葉は一見、あまりにも反資本主義的で不愉快で偏向的なものとして映るかもしれない。だが、1つだけお願いしたいのは、ヴァンデルホフがいかなる時代をどこで生き、どのような現実を見てきたか、何を経験し、何を思い、その結果この思想を見出したのかについて、想像しながら読んでいただきたいということである。そこには、今日の国際フェアトレード運動の父ともいえる人物が、30年以上の長きにわたって先住民族と暮らし、ともにその思想を見出したという事実がある」(iii)。

現地の人々に「寄り添う」こととは、そこにある多様な価値・固有の価値に耳を傾け、必要に応じて、外部の知見や技術と接続できる関係性をつくることである。本来、開発は価値中立的な社会工学の応用ではなく、価値選択的で人間的な営為だと私は考えている。どのような発展を望むかは、現地の人々が選択する価値に連動するはずだ。この意味において、本来的な開発は社会変革の要素を含んでいる。人間的営為である以上、変革としての開発にかかわる特定

¹本節および次節には、口頭発表レジメ「貧者とともに生きる F. ヴァンデルホフ『貧しい人々のマニフェスト』を読む」(国際開発学会第17回春季大会、2016年6月11日)からの段落単位での抜粋が含まれる。

個人の経験や価値観はその人の仕事や実践に必ず影響し、それは人間社会を改良する原動力の1つになりえる。

チアパス州の先住民系コーヒー組合とのフェアトレードプロジェクトを指導し、また、サバティスタ運動のテキスト分析の研究をした山本純一先生は、外部から先住民社会に入り、変革を促す人材のことを「内在的他者」と呼んでいる²。一見、地域コミュニティ内部からの要求とみられるものが、外部から持ち込まれた価値観によるものであった、または、それとのハイブリッドであったことを示唆し、彼らの要求の内発性・純粋性を批判的に捉える研究もある。こうした視点とは別の観点、すなわち、時代と個人の対話 内在的他者としてのヴァンデルホフの人生と彼が生きた時代 を意識して、彼の言葉の背後にある価値観を探り、外来・内発という二項対立を止揚し、貧者に寄り添い共に生きた者のみが語り得る言葉の意味を探るという点で、本書の学術的な価値は小さくないと考える。

ヴァンデルホフのように、人々に添い遂げる人生を送った人物は希有な存在である。だからこそ、その人生と経験から紡ぎ出された言葉には、私たちが耳を傾けるべき示唆が含まれている。

ヴァンデルホフの言葉から

「経済は人間に奉仕すべきであり、その逆はあり得ない」と彼は言う。経済というものは人間の生活の必要から生み出された。だが今日、私たちは経済のなかで生き、経済に奉仕することを余儀なくされている。本来、経済は人間社会に埋め込まれていたが、今では、社会が経済

の荒波に翻弄される存在である。経済が政治を動かす、ルールを改変し、メディアを操る。だが「経済とは、広大だが有限で閉じたシステム = 生物圏の部分集合に過ぎない。結論として、際限なき成長は不可能」なはずだ(86-87)。無限の権力を手に入れた大企業が暴走しても私たちに止める手段はなく、それに気づく機会さえ奪われてしまった。第三世界の誇り高き貧者たちは、こうした事柄について先進国の人々以上に敏感であり、免疫をもっているとヴァンデルホフはいう。

開発支援や援助に対する彼の指摘は辛辣である。「思いやりという名の下に、自分たちの意志を貧しい人々に押し付けてしまう。(略) NGOには、非常に好意的かつ優秀で、善意に満ちあふれたスタッフもいる。だが、一般論として、彼らのメンタリティは彼らが成すべきはずだったこととは逆の方向に作用する。(略) 3~5年間プロジェクトを実施し、その後ことは考えず、バトンを持ったまま帰ってしまった NGO を私自身どれだけ見てきたことか。(略) 彼らがやろうとしていることは、不幸という名のカーペットを持ち上げて、自分たちの存在を世に知らしめることに過ぎない」(63)。農民は大金持ちになることも、政府や NGO 等の外部からの支援に依存しながら生き続けることも望んでいない。「借り」を作らず、衣食住と尊厳を維持しながら生きる、それだけが願いだという。

五月革命世代であった彼がヨーロッパ時代に経験した挫折は 1968 年の学生運動であった。代案なき反対は空虚だと彼はいう(85)。フェアトレードは、テワンテペック地峡のコーヒー農民とヴァンデルホフたちがオランダのパートナーとともに創り出した具体的な代案である。おそらくは、西欧および北米³での経験とラテン

² 慶応義塾大学湘南藤沢学会ウェブサイト、山本純一教授最終講義「サバティスタからフェアトレード、そして大地の大学へ」http://gc.sfc.keio.ac.jp/class/2015_gc00001/slides/13/intro.html (2016年11月5日アクセス)

³ ヴァンデルホフは一時、カナダのオタワ大学で教鞭を

アメリカでの経験（チリ、メキシコ）から、彼は次のようなテーゼを見出した。「貧困者の叢書はしばしば軽薄な経済学者や社会学者の知識よりも重要な場合がある。貧困者の能力と富裕者の能力は同じである」（86）。そして、貧しいコーヒー農民たちは、グローバル資本主義の矛盾およびそれにどう対処していくかを既に知っているという。一方、「資本主義下では、誰も責任を取らず、誰も罪に問われない。そこには市民的責任の怠慢がある」（32）と断罪する。現実を見ようとしなないのは、「無知で貧しい」はずの貧困者ではなく、北の富裕層である。だからこそヴァンデルホフは、北の富裕層にも人間としての本来的な資質が備わっているはず、という当たり前の事実を期待する。

ここで、私が想起したのは「いかに人間が利己的であるように見えようとも、人間の本質の一部として、他の人の運命に関心をいただき、そして他の人の幸福を自分にとってのかけがえのないものとして感じる何らかの原理が明らかに存在している。たとえ自分が得るものが何もなくとも、他の人の幸福を見るだけで嬉しいと感じる何かがあるのである」というアダム・スミスの『道徳的感情論』の一節である。人間の本質をどう捉えるかという点において、ヴァンデルホフは根源的なヒューマニストだといえよう。

訳者にとっての本書の意味

私にとって、この本には2つの意味がある。

第1は、食と農からグローバリゼーションを批判的に捉える書として、農業のグローバル化と北米におけるローカルフード運動について述べた前訳書、トーマス・ライソン著『シビック・アグリカルチャー 食と農を地域に取り戻す』

とっていた。

（農林統計出版）の姉妹編という意味である。2冊の拙訳書は、それぞれ、^{フード・ソブリエティ}食料主権論のローカル版とグローバル版である。

第2は、本誌第16号で紹介した拙著『南部メキシコの内発的発展とNGO』（日本協同組合学会賞学術賞と日本NPO学会賞優秀賞を受賞、および、日本国際地域開発学会奨励賞受賞論文収録）の延長線上の仕事という意味である。同書に対しては、一部から手厳しい辛辣なご批判を頂戴した。一方で、オアハカ州の先住民族ミヘ人の文化変容を長年研究されてきた先達の黒田悦子先生からいただいた「この本は必読文献、特にヴァンデルホフの章」という言葉は私の密かな財産であり続けた。ヴァンデルホフの新しい本を見つけた時、自分が訳し、解説を書き、日本の読者に紹介したいという思いが瞬間的に頭を巡った。

ヴァンデルホフとの約束

およそ10年前、イクステペック市にあるUCIRI事務所でヴァンデルホフと面会した際、私は彼とある約束をした。もちろん、彼は私のことも約束のことも覚えていないだろう。

彼は私に次のようなことを言った。開発にかかわる外部者は客観的・科学的な技術をもたらす無色透明な存在ではない。そのように振る舞う（貴方のような）人間は地域社会から情報だけを一方的に持ち去る泥棒である。私は次のように返答した。自分はあなた方に何も還元することはできないが、日本に帰ったら、あなた方のことを授業その他を通じて大勢の人々に伝えることをお約束します。前作『南部メキシコ』もこの翻訳書も、私にとっては、この約束の一部である。

一人でも多くの方々に本書を読んでいただきたい、と切に願う次第である。